ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「白はね、私がパパしかられる時、いつも白もおこられてくれるの。『これは自分の責任です』って」

　来夢音に追いついて、一緒に白を探すことになった雅也に来夢音がポツリと呟いた。

「でもね、私知っているの。白はパパにしかられた後、優さんにもしかられるのよ」

「へぇ……まぁ、でもさ。白って来夢音の執事じゃん？　それが当然――」

「やめて」

　一オクターブ下がった来夢音の声に、雅也は思わずビクッとなる。

「そりゃあさ、たしかに白は私の『しつじ』だけど……」

「し……執事だけど？」

「でも、白は何も悪くない。私のために、いっしょにおこられることなんてないと思う」

　そう言って、来夢音はプクゥっと頬を膨らませた。

「白なんて、そんなことぜんぜん言わないから……これ知ったの、ちょっと前なの」

「へ、へぇ」

　そういえば、『お嬢様をお守りするのが自分の役目』と白が言っていた事を、雅也は思い出す。

　もしかすると、それも白の言う『お嬢様をお守りする』事の内に入っているのだろうかと、彼は思った。

「まあ、今日はおきゃくさまの前だったから、私がおくれてきても、白がみんなの前でおこられることはなかったんだけど……。それでもあの後、二人におこられたの、知っている？」

「う……ううん。それ、本当なの？」

　そんなやり取りがあったことなぞ、当然雅也は知らなかった。

「本当よ。私、聞いたから。全く……今日は白、雅也たちをむかえにいったんだから、しかたないじゃない。なんで白までおこられなきゃならないんだろう……」

「……」

「私、バカだった……」

「……そう？」

「だって私、『白もいっしょにおこられてくれる。一人じゃない』なんて、ちょっとよろこんでいたもの」

　なんと反応すればよいか分からず、雅也はただ黙って来夢音の、愚痴にも近い話を聞いていた。それも仕方の無いことだろうとは思うものの、来夢音の気持ちも分からなくもないからだ。

まだ、彼女は続ける。

「それに、私、ポケモンバトルの時、いつも白にたよりっぱなしだし……」

「うーん……」

「白がいて、はじめて私たちは相手にこうげきを当てられるの。私たちだけじゃ、何にもできないわ」

「そ……そうかな？」

「そうよ」

　疑問形の雅也の声に、来夢音は力強く頷いた。

　確かに白のサポートは秀逸で、それは雅也も認める所ではある。

　だが、彼のパートナーである来夢音がそれを生かしてこそ、二人はマルチバトルで勝てるのだ。事実、別に来夢音のポケモンは弱くは無く、寧ろ十分戦えている方である。来夢音の指示も悪くない。それは、今日の拓馬・良助とのバトルで証明されていることだ。

　とはいえ、確かに『白に頼ってばかり』という事を否定するのは難しいだろう。決して間違ってはいないからだ。

　しかし、彼女が白に頼りっぱなしだと考えているのと同様に、白も来夢音に頼りっぱなしだと考えている。そんな悩み事を打ち明けられた側からすると、雅也はどう言ったらいいものか困っていた。先程から、口を魚のようにパクつかせながら、頭の中で何とかいい言葉はないものかと思考を巡らしている。

「本当は」

「……？」

「もっと私たちが、前に出れればいいんだけど……」

「十分じゃないかな？」

　少なくとも、雅也にはそう思えた。今日のバトルを見れば、十人が十人、そう思うだろう。

　だが、彼女は違うらしい。ゆっくりと首を横に振る。

「白はいつも私を守ってくれる。だから、せめて……ポケモンバトルの時くらいは、私たちが白たちを守らなきゃだめなの」

「……」

　それを聞いて、雅也は黙って天を仰いだ。どうも、互いが互いを守りたい意思が強く、それが互いにとっての悩みの根本になっているらしい。

　これは、どうしたらいいのか、もはや彼にはお手上げだった。

　だが、同時にふと気になった事も。そういえば、まだ聞いていなかった事だった。

「……もしかして、この森に来たのも？」

「うん。すこしでも強くなりたいから……せめて、私たちだけで白を守れるくらいに。いつもまたしを守ってくれる白に、かえしたくて」

「で、でも、ここのポケモンは凶暴なんじゃ……」

　さっきのルチャブルを思い出して、雅也は聞く。彼等は、白のサポートがあってようやく倒せたほど強かったのだ。

　ここで頷かれ、あまつさえ簡単に倒せたなんて言われた日には、二人はちょっと立ち直れないだろう。

　そう思ったのだが――

「それが、出てこなかったんだよね……」

　溜息を吐く来夢音に、ホッと胸をなで下ろしてしまった雅也を責められるものはいないだろう。